



2013年9月3日(火)夜、猫の集会...ではなく、アントネッロ主催モンテヴェルディ三大オペラ第一弾「歌劇《ポッペアの戴冠》(L'Incoronazione di Poppea)」を観に、京浜東北線「川口」駅前にあるリア音楽ホールへ行ってまいりました。会場に入ってまず目についたのが正面のパイプオルガン。いいですね。中規模ながらホール総体の設計がよく、ホール内でもくつろげました。猫は家に馴染むので居心地の良い処が大好き。そういうわけで早速以下に感想を述べたいと思います。(2013.9.4 記)

### ■音楽構成と指揮がよかった

クラウディオ・モンテヴェルディの曲(一部弟子の加筆あり)が良いのか、はたまた指揮者：濱田芳通氏のアレンジが良いのか—感情をかき立てる音楽構成が良かった。加えて指揮の滑らかなこと。指揮者のキューから歌の滑り出しへの流れるようなつながり、曲の最後の音の収め方がきれい。演奏と歌の一体感。管弦楽団：アントネッロは素敵な集団ですね。

### ■演劇的モノローグの挿入が良かった

オペラではなく演劇で見られるような独白場面が、ホッとする空間と感情の立ち止まる時間を作ってくれました。ユーモアの中に真実が隠れている、あるいは真実をユーモラスに語る。

### ■照明と字幕が良かった

現代風の遊び心がある明朗でキュートな照明。字幕の内容も現代風で簡潔。字幕内に現れた文字以外の効果にも遊び心があり、楽しめました。

### ■アピール力

与えられた役柄にも左右されますが、舞台上に登場した途端、惹きつけられる人がいます。それはその人の醸し出す空気感です。それは存在感と言い換えて良いかもしれません。その人を囲む空気がその人のものに見えた人：澤村翔子さん、酒井崇さん、赤地佳怜さん  
その人の輪郭の空気が違って見えた人：黒田大介さん

### ■感情表現力

本人のキャラクターや与えられた役柄にも左右されますが、赤地佳怜さんは、愛の神アモーレ(キューピッド)の自負といたずらっ子のキャラクターを、末吉朋子さんはドゥルジッラの愛しい人と結ばれる素直な喜びの感情を見事に表現していたと思います。

### ■総体

皇帝ネローネ(ネロ)にカウンターテナーの彌勒忠史さん。正直、私のイメージではこの役はハイ・バリトンでした。何故なら運命の歯車が狂って悪名を歴史に刻んだネローネですが、それまでは良い政治を行っていた勇者だったからです。ですから音的にちょっと高いかなと思いましたが、三連作を Total で見た配役でしょう。その線の細い印象は最後の力強い歌い上げが払拭しました。その時点でネローネ個人ではなく、人間全般の表現になりました。そしてネローネの強さではなく物分りの良さが見えた本公演では、逆に私の中で別の効果を生み出しました。それはネローネとポッペアの愛の軽さが、ドゥルジッラとオットーネの愛の強さを強調したからです。そこに愛の真髓と作品のクライマックスが見えました。そのシーンが他のシーンを吸い取ってしまったかと思えるほどに。

また印象的だったのは「若さは一時的なもの」ということ。人生の春から秋、そして冬。同じラテン系の国のロダンの彫刻でも、シャンソン・フランセーズでも同様の表現をします。そして妃の座を手に入れるポッペアと共に身分の上がる侍女アルナルタが語った「奴隷に生まれて貴族で死ぬよりも、貴族に生まれて奴隷で死ぬ方がいい」という言葉。ギリシャ、ローマの英雄たちの栄枯盛衰を感じます。

そしてアルナルタ役：カウンターテナーの上杉清仁さん。実は初めて聴きましたが、低めの声の役の中で披露した本来のカウンターテナーの声はのびやかできれいでした。こんな風にちょっと違った感覚を喜べる場面が本公演には所々ありました。

そして和洋折衷のこの舞台、イタリア語の中にさりげなく挟まれた日本語も自然に馴染んでいました。今まで見たことのなかった「ウツ？」という感覚も、最後には楽しい印象で終わりました。ただカボチャの馬車(終電)だけが気がかり。何故って？シンデレラ(灰かぶり姫)はイタリアでは「灰かぶり猫」(cenerentola)なの。ドゥルジッラの衣裳ならぬ、人間の被り物の魔法が解けたら大変でしょうが。